

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320116

研究課題名(和文)文法モジュールとインターフェイス論に基づく外国語習得研究の新展開と学習法への示唆

研究課題名(英文)Modularity of Grammar and Interface Theory: New Developments in the Study of Foreign Language Acquisition and Their Implications for Learning English and Japanese

研究代表者

吉村 紀子 (Yoshimura, Noriko)

静岡県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：90129891

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,900,000円、(間接経費) 4,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文法モジュールとインターフェイス論の知見に基づき、英語と日本語の習得過程を実証的に調査し、理論的な分析から効果的な外国語学習方法について提案することを目的とした。研究成果として、統語では、局所性のため、深刻な母語の転移はなく、習熟度の向上に伴って習得が促進することが確認され、意味解釈では、母語と外国語のズレが習得上のむずかしさに繋がる点があきらかになった。また、形態意味では、形式が意味より先に習得されることがわかった。したがって、外国語学習では、WH-移動の制約、「自分」と代名詞の用法、過去・完了形・進行形のアスペクトの概念と意味について明示的な指導が不可欠であると結論付けた。

研究成果の概要(英文)：This study investigated L2 acquisition of English and Japanese from the viewpoint of the theory of modularity of Grammar. Japanese-speaking learners of English and English-, Turkish-, and Chinese-speaking learners of Japanese participated in various experiments, and the results were analyzed based on the Interface Hypothesis with the goal of providing practical suggestions for the development of innovative methods for teaching and learning foreign languages. Our analysis showed that syntactic acquisition can be facilitated as proficiency in the target language improves due to locality. However, it was demonstrated that wh-movement, overt and null pronouns, and tense and aspectual meanings were difficult for L2 learners to acquire due to L1 transfer at the syntax-semantics and morphology-semantics interfaces. Based on these findings, the importance of explicit teaching was emphasized for the acquisition of long-distance movement, pronouns, and present perfect in the target languages.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得理論 文法モジュール インターフェイス 局所性 母語の転移 束縛原理 アスペクト
形態-意味のマッピング

1. 研究開始当初の背景

文法のモジュール性という概念は第二言語習得研究の分野において新しい視点と展開をもたらした。その結果、外国語の習得上の誤りや問題点はモジュール間の繋がりが一すなわち、統語→形態音韻、統語→論理形式、統語→語用・談話—という観点から捉えるべきであるというインターフェイス仮説の提案に至った。

しかしながら、この2つの理論を枠組みとした研究は始まったばかりで、特に英語と日本語の学習者による外国語習得についてはほとんど実施なされていなかった。そこで、本研究では形態・統語・意味・談話のインターフェイスの領域に考察の焦点を絞り、第二言語習得研究の調査を進めて行くこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)学習者の言語の習得過程で観察される言語間の相互作用、具体的には「母語から外国語へ」の転移 (transfer) の現象について、日本語・英語・中国語・トルコ語の母語話者で学習外国語が英語と日本語の被験者を対象に比較横断的な研究を行い、外国語習得の本質と過程のメカニズムを解明し、(2)その研究成果を試行教育において予備的に実践し、その結果に基づき英語教育及び日本語教育の分野においてより効果的な学習指導の方法や技術を提案することであった。

主な研究テーマとして、①長距離 WH-移動、特に主節動詞 think 対 ask による WH 句の位置の選択、②代名詞の運用と解釈、③アスペクト (過去・完了・進行) の形態と意味の関係を上げ、日英語比較言語理論からの議論に基づいて実証的な資料を収集・分析して考察し、外国語習得理論への展開が促進できるように計画した。

3. 研究の方法

本研究では、研究期間中、数種類の実験を日本、北米、トルコで並行して遂行したため、実験に参加した被験者グループは以下の8グループとなった。

(1)被験者グループ

- ①静岡県内の高校3校からの高校生1~2年生グループ
- ②静岡県内の大学2校及び神奈川県内の大学1校からの大学生(理系・文系)グループ
- ③静岡県内の中高校の英語教員グループ
- ④トルコの大学で日本語を学習していたトルコ語が母語の大学生グループ
- ⑤北米の2つの大学で学ぶ英語が母語の大学生グループ
- ⑥北米の2つの大学で日本語を学ぶ英語が母語の大学生グループ
- ⑦北米の2つの大学及び日本で日本語を学ぶ中国語が母語の大学生グループ
- ⑧北米の1つの大学で学ぶ、あるいは教えている、英語がほぼネイティブに近い日本語母

語話者。

(2)資料

各実験の趣旨に沿って、3種類(Yes/No、4択選択、スケール値測定)の文法性容認度に関するアンケート調査にて資料収集した。

(3)分析

分析では、各実験の調査目的に沿って、参加者を学習言語の習熟度別(英語—大学生の場合、TOEICもしくはTOEFL、高校生の場合、英語検定、日本語—履修クラス、学習年数、あるいは独自の習熟度テスト)に分けて、結果を統計的に多重比較分析した。

4. 研究成果

研究成果は、文法モジュールのインターフェイスの観点から以下のようにまとめることができる。

(1)統語 - 意味の接点

日本語が母語の英語学習者

- ①早期の段階から束縛原理を習得できる。
- ②英語の不定詞節の主語の位置に見えない「無形主語」が存在することを理解できない。

[主節主語 動詞句 [不定詞 無形主語-to 動詞句]]

- ③日本語母語話者は「局所性」は理解できる一方、素性[+wh]の照合位置の習得が極めてむずかしい。

- ④大学生にWh-長距離移動を容認しない動詞(ask /wonder (1b))の構造を明示的に指導したが、学習効果がなかった。例えば、多くの学習者が次のような2文を区別できない。

a. Did Ken ask her *what* Ellen gave him at the party?

b. **What* did Cathy ask you your friend wrote?

英語・中国語・トルコ語が母語の学習者

- ⑤照応形'himself'と「自分」の習得は、母語に関係なく、長距離束縛が短距離束縛よりむずかしい。

- ⑥母語の知識は外国語習得の「手助け」として機能する。

(2)統語 - 談話

日本語が母語の英語学習者

- ①物語の構築において、人称代名詞の適切な使用に問題があり、固有名詞を過剰使用する傾向にある。

英語が母語の日本語学習者

- ②談話の中で代名詞を適切に省略することは初級レベルにとってむずかしい。

(3)形態 - 統語-意味

日本語が母語の英語学習者

- ①初級~中級レベルの学習者にとって現在完了形がむずかしい。例えば、次のようなコンテキストで、aの文を容認する。

「トモコは有能なプロジェクトリーダーです。締切りのレポートがあって、昨晩は徹夜しました。今、やっと終わって、ほっとしているところです。」

a. **Tomoko is finishing a project report.*

b. *Tomoko has finished a project report.*

- ②現在完了の代わりに過去形を誤用する間違いが多く見られる。つまり、現在完了の形式(have -en)は習得できているが、その意

味と適切な使用は習得が極めてむずかしい。例えば、初級レベルの大学生が書いた作文では、約40%が現在完了の代わりに誤って過去形を使用していた。

③アスペクトの習得には、日本語を介した英語教育は効果的でない。

英語・中国語が母語の日本語学習者

④「～た」は、形式・意味の両面において習得はむずかしくない。

⑤「～ている」は、継続相と完了相を区別して運用・解釈するのが初級～中級レベルにとってむずかしい。

⑥効果的な学習方略は検討を要する。

以上、明示的な指導の効果が見られたのは文レベルの代名詞の解釈と用法で、長距離WH移動については段階的な指導が重要であることがわかった。また、談話レベルの人称代名詞の用法や現在完了形の用法は場面ごとに、また意図する意味解釈ごとに異なるため、明示的な指導は限定的になってしまった。明示的な指導の下、どのように学習を進めて行けばよいのかは今後の課題である。特に、概念や意味の習得が日英語の齟齬によって負の影響を受けているという結果から、日本語に置換えた指導(和文英訳・英文和訳)は適切なものではないことを再確認する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 16 件)

①Shirahata, Tomohiko, Noriko Yoshimura, & Koichi Sawasaki. Locality and Disjointness in Adult Second Language Acquisition. *Proceedings of GALA 2013 (Generative Approaches to Language Acquisition)*. (査読有) Cambridge Scholars Press. To appear.

②Yoshimura, Noriko, Mineharu Nakayama, Atsushi Fujimori, & Koichi Sawasaki. L2 Acquisition of Grammatical Aspect in English. *Selected Proceedings of the 5th Conference on Generative Approaches to Language Acquisition North America (GALANA 2012)*. (査読有) 2014. Cascadilla Press. 140-149.

③澤崎宏一・寺尾康・白畑知彦. 「英語学習者の談話における三人称代名詞の使用-固有名詞との比較をとおして」『ことばと文化』17号. (査読無) 2014. 1-21.

④Yoshimura, Noriko, Koichi Sawasaki, Mineharu Nakayama, Reo Kawasaki, & Atsushi Fujimori. Morphosyntactic-semantic Mappings and acquisition of English present perfect. *Journal of International Relations and Comparative Culture*, 12. (査読無). 2014. 133-147.

⑤武田修一. 「英語現在完了形構文の教育意味論」*Ars Linguistica* 20. (査読有). 2013. 23-39.

⑥吉村紀子. 「アスペクトの習得—なにがなぜむずかしいのか」『ことばと文化』16号. (査読無). 2013. 77-88.

⑦Fujimori, Atsushi, Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Koichi Sawasaki, & Shuichi Takeda. Acquisition of English Perfectives by Japanese Adult Learners. *Ars Linguistica* 20. (査読有). 2013. 62-72.

⑧武田修一. 「英語現在完了形構文の意味論」*Ars Linguistica* 19. (査読有). 2012. 78-90.

⑨Yoshimura, Noriko, Mineharu Nakayama, Atsushi Fujimori, & Koichi Sawasaki. L3 acquisition of *Zibun* by Chinese learners of Japanese. *Ars Linguistica* 19. (査読有). 2012. 133-144.

⑩Yoshimura, Noriko, Mineharu Nakayama, Tomohiko Shirahata, Koichi Sawasaki, & Yasushi Terao. (2012). *Zibun* and locality in L2 Japanese. *Journal of Japanese Linguistics*, 28, (査読有). 2012. 89-110.

⑪吉村紀子. 中山峰治. 「なぜ/s/はwh-移動よりむずかしいのか」『ことばと文化』15号. (査読無) 2012. 41-52.

⑫Shirahata, Tomohiko. Syntactic Comprehension of Japanese Structures by Chinese Learners. *Ars Linguistica* 18. (査読有). 2011. 53-64.

⑬武田修一. 「現代英語における現在完了形の使用基盤に関する認知論的考察」*Ars Linguistica* 18. (査読有). 2011. 65-79.

⑭Yoshimura, Noriko & Mineharu Nakayama. L2 Acquisition of Overt WH-movement Revisited. *Ars Linguistica* 18. (査読有). 2011. 194-216.

[学会発表] (計 22 件)

①Noriko Yoshimura, Tomohiko Shirahata, Mineharu Nakayama, & Koichi Sawasaki. An Experimental Study of Anaphoric and Pronominal Binding in L2 English: L1 Transfer, Pragmatic Constraint, and Syntactic Knowledge. 日本第二言語習得学会第14回大会(J-SLA 2014), 2014年5月31日. 関西学院大学.

②Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Atsushi Fujimori, & Koichi Sawasaki. Without One to One Morphosemantic Relations between L1 and L2: A Case Study of Japanese-Speaking learners' Acquisition of English Present Perfect. The Expression of Temporality by L2 Learners of French and English: Acquisition of Time, Aspect, Modality. 2014年5月24日. モンペリエ第3大学(フランス).

③Tomohiko Shirahata, Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Koichi Sawasaki. Japanese EFL Learners' Knowledge of Coreference in Tensed and Infinitive Constructions. 2014 International Conference

on Applied Linguistics and Language Teaching (ALLT). 2014年4月19日. 国立台湾科技大学.

④ Nakayama, Mineharu, Noriko Yoshimura, & Koichi Sawasaki. Sensitivity to the Speech Time: Acquisition of TE IRU by JSL Learners. 8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ 8). 2014年3月23日. 国立国語研究所.

⑤ Tomohiko Shirahata, Noriko Yoshimura, & Koichi Sawasaki. Locality and Disjointness in Adult Second Language Acquisition. Generative Approaches to Language Acquisition (GALA). 2013年9月5日. オルデンバーグ大学 (ドイツ).

⑥ Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Reo Kawasaki, Koichi Sawasaki, & Atsushi Fujimori. Morphosyntactic-Semantic Mappings in Japanese-English Interlanguage. European Second Language Association 23 (EUROSLA). 2013年8月30日. アムステルダム大学 (オランダ).

⑦ Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Koichi Sawasaki, & Atsushi Fujimori. What Makes It Hard to Acquire Present Perfect in L2 English? 15th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences (JSLS). 2013年6月29日. 活水女子大学.

⑧ Shirahata, Tomohiko. Effects of Explicit Instruction on the Semantic Role of English Sentence-Initial Subjects: A Case of Japanese EFL Learners. Hawaii International Conference on Education. 2013年1月9日. ハワイヒルトンホテル.

⑨ 澤崎宏一. 「日本語文処理について—L1とL2の関係節処理を中心に」日本第二言語習得学会秋季研修会 (招待講演) 2012年10月28日. 中央大学.

⑩ 吉村紀子. 「英語の過去と現在完了の習得一産出と解釈の資料分析」日本第二言語習得学会秋季研修会 (招待講演) 2012年10月28日. 中央大学.

⑪ Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Atsushi Fujimori, & Koichi Sawasaki. L2 Acquisition of Grammatical Aspect. Generative Approaches to Language Acquisition North America 5 (GALANA). 2012年10月11~12日. カンサス大学 (米国)

⑫ Atsushi Fujimori, Mineharu Nakayama, Noriko Yoshimura, & Koichi Sawasaki. L2 Acquisition of Continuous Events by Japanese EFL Learners. 言語科学会第14回年次国際大会. 2012年6月30日. 名古屋大学.

⑬ Noriko Yoshimura & Mineharu Nakayama. Acquisition of Wh- movement by Japanese Learners of English: Feature Valuation, Selectional Restriction and Scope Interpretation. 第12回日本第二言語習得学会. 2012年6月2~3日. 法政大学.

⑭ Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Atsushi Fujimori, & Koichi Sawasaki. The L3 Acquisition of Zibun by Chinese Learners of Japanese. International Conference on Bilingualism and Comparative Linguistics. 2012年5月15~16日. 香港中文大学.

⑮ Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Koichi Sawasaki, Atsushi Fujimori, & Hiroya Shimizu. L2 Knowledge at the Syntax-Pragmatics Interface: Interpretations of Reflexives by Japanese, Korean, and Chinese ESL Learners. The 13th Tokyo Conference on Psycholinguistics. 2012年3月10日. 慶応大学.

⑯ 吉村紀子. 「日本語母語話者による英語時制の習得一形態と意味語用の接点からみる」公開ワークショップ「日本人英語使用者の時制習得の問題点」2012年1月21日. 宮城学院女子大学.

⑰ Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Atsushi Fujimori, & Koichi Sawasaki. L2 English reflexives and the syntax-pragmatics interface. 5th International Conference on Formal Linguistics. 2011年12月12日. 広東外語外資大学 (中国).

⑱ 吉村紀子. 「英語の形態素の習得一産出から見える母語の役割」(招待講演) 中央大学人文科学研究所公開研究会「言語の理解と産出」2011年12月3日. 中央大学.

⑲ Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Koichi Sawasaki, & Hiroya Shimizu. Locality in L2 Japanese and English. Generative Approaches to Language Acquisition (GALA) 2011. 2011年9月7日. テッサロニキ大学.

⑳ Noriko Yoshimura & Mineharu Nakayama. L2 Acquisition of English Expletives and Raising Constructions. 言語科学会 第13回国際年次大会. 2011年6月26日. 関西大学.

[図書] (計5件)

① Yoshimura, Noriko, Mineharu Nakayama, Koichi Sawasaki, & Hiroya Shimizu. Cambridge Scholars Press. *Advances in Language Acquisition* (41章: Locality in L2 English and Japanese, 375-385). 2013. 500.

② Yoshimura, Noriko, Mineharu Nakayama, Koichi Sawasaki, Atsushi Fujimori, & Baris Kahraman. ひつじ書房. *The Proceedings of the Fourteenth Tokyo Conference on Psycholinguistics* (12章 The development of long-distance *zibun*: Roles of L1 and L2 in L2 acquisition, 221-236). 2013年. 272.

③ Yoshimura, Noriko, Mineharu Nakayama, Koichi Sawasaki, Atsushi Fujimori, & Hiroya Shimizu. ひつじ書房. *The Proceedings of the Thirteenth Tokyo Conference on Psycholinguistics* (L2 Knowledge at the Syntax-Pragmatic Interface: Interpretations of Reflexives

by Japanese, Korean, and Chinese ESL Learners, 303-323). 2012 年.

④白畑知彦・鈴木孝明. くろしお出版. 『ことばの習得』2012 年. 247.

⑤白畑知彦. 開拓社. 『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』(12 章「第二言語習得における否定証拠の効果：主語卓越構文の習得を題材に」157-168) 2012 年. 232.

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉村紀子 (YOSHIMURA NORIKO)
静岡県立大学・国際関係学部・特任教授
研究者番号：90129891

(2) 研究分担者

澤崎宏一 (SAWASAKI KOICHI)
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：20363898

(3) 研究分担者

白畑知彦 (SHIRAHATA TOMOHIKO)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：50206299

(4) 研究分担者

武田修一 (TAKEDA SHUICHI)
静岡県立大学・国際関係学部・教授
研究者番号：80137067

(5) 研究分担者

寺尾 康 (TERAO YASUSHI)
静岡県立大学・国際関係学部・教授
研究者番号：70197789

(6) 連携研究者

須田孝司 (Koji Suda)
富山県立大学・工学部・准教授
研究者番号：60390390

[研究協力者]

中山峰治 (NAKAYAMA MINEHARU)
オハイオ州立大学 (米国)・東アジア言語
文学部・教授